

中山道最大の宿『本庄宿』の再発見

その式 本庄市中央3丁目～上里町神流川橋



溪斎英泉の浮世絵「本庄宿 神流川渡場」

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所

発行に当たって

中山道は、今から 400 年ほど前に徳川幕府により整備された江戸と京を結ぶ街道で、道筋には 69 の宿場が設けられました。

武蔵の国最後の宿場である本庄宿は中山道最大規模の宿場として大いに賑わっていました。

中山道を歩くと、昔ながらの商家や蔵など往時の面影を残す風景に出会えます。

これらの貴重な地域資源を再認識してもらうとともに、今の中山道を後世に伝えるために、このほど「その壺（滝岡橋～本庄市中央 3 丁目）」に続き、「その式（本庄市中央 3 丁目～上里町神流川橋）」を作成しました。

中山道の歴史、見どころ、グルメスポットのほか、隠れたエピソードや住んでいる人のインタビューなども掲載しています。

中山道を歩き、楽しむ際のガイドとして活用いただければ幸いです。

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所長 石川 勉

【江戸時代 中山道のベスト5】

天保 14 年(1843年)中山道宿村大概帳

人 口		家 数		旅籠屋数	
本庄	4,554	本庄	1,212	深谷	80
高宮（彦根）	3,560	熊谷	1,075	塩尻	75
熊谷	3,263	高崎	837	本庄	70
高崎	3,235	高宮（彦根）	835	鴻巣	58
加納（岐阜）	2,728	加納（岐阜）	805	板橋・板鼻（安中）	54

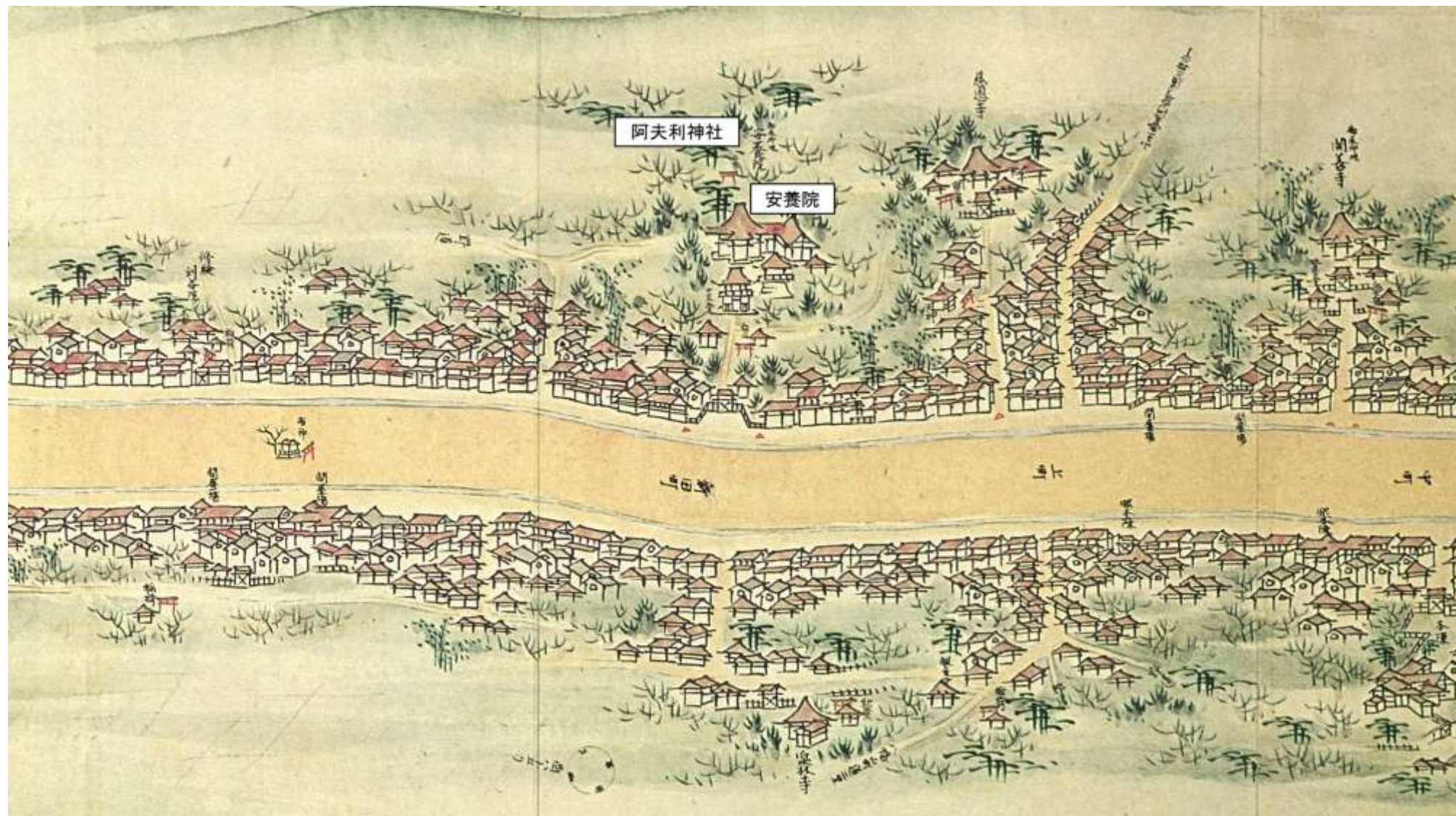
※滝岡橋(本庄市堀田)から神流川橋(上里町勅使河原)までが本庄宿役人の管轄でした。

目次

- 第6章 中央3丁目交差点 ～ 若泉公園 ～ 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫……………3
- 賀美橋
 - 若泉公園
 - 阿夫利天神社
 - 普寛霊場
 - 安養院
 - 蔵髪
 - **ちょっと一息 ～植村貴之氏～**
 - 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫
- 第7章 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 ～ 本庄市立図書館入口……………13
- 株式会社金正
 - 旧中澤医院
 - ふくしま製菓舗
 - 野口製麺工場
 - 関東有数の豪商 戸谷半兵衛
 - **ちょっと一息 ～戸谷圭一郎氏～**
 - **本庄の事件簿 ～新選組大篝火事件～**
- 第8章 本庄市立図書館入口 ～ 上里町神保原（本庄市・上里町境）……………23
- 本庄宮本・蔵の街
 - **ちょっと一息 ～戸谷正夫氏～**
 - **本庄グルメ ～cafe NINOKURA～**
 - 金鑽神社
 - 佛母寺
 - 長松寺
 - 唐鈴神社
- 第9章 上里町神保原（本庄市・上里町境）～ 神保原1丁目交差点……………31
- 浅間山古墳
 - 中仙道の標柱
 - 汨橋跡
 - 安盛寺
 - 神保原駅
 - **ちょっと一息 ～唐澤伸哉氏～**
 - キムラヤ乳業株式会社
 - **上里グルメ ～塚越製菓店～**
- 第10章 神保原1丁目交差点 ～ 神流川橋……………41
- 金窪神社
 - 陽雲寺
 - 須賀家
 - **ちょっと一息 ～須賀正昭氏～**
 - 高窓の家と勝場庚申塔群
 - 一里塚碑と天王社
 - 大光寺
 - 勝場百庚申塚
 - 神流川の渡し場跡
 - 神流川合戦古戦場跡

第6章 中央3丁目交差点 ～ 若泉公園 ～ 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫

江戸時代はこんな感じ



これが現在



中央 3 丁目交差点から中山道を外れて北に向かってみる。
この道は本庄市と群馬県伊勢崎市を結ぶ伊勢崎新道だ。

330 メートルほど進むと小さいながらもモダンな橋がある。これが賀美橋だ。

賀美橋



伊勢崎新道の開削に伴って大正 15 年（1926 年）に建設された鉄筋コンクリートの桁橋で橋長 6.3 メートル、幅員は 9 メートル。

国登録有形文化財である。

親柱の上部に家型の装飾が施されており、当初はその上にガラス製の柱灯と受台があったらしい。

親柱の各面には三角ペディメントがついており、また、橋の下部にある 7 つの連続アーチには縁に白いタイルが張り付けられている。凝った造りである。

賀美橋の西側には若泉公園が広がっている。

若泉公園



公園の急崖は烏川の浸食によって形成されたもので、以前は崖際から豊富な湧水があった。

安養院の山号「若泉山」もこれに由来している。

公園内を流れる元小山川の旧川は、崖下より湧く清冽な清水を水源としており、公園より上流一帯は清水河原とも呼ばれた。

しかし、近年は湧水も止まり、現在はポンプで汲み上げた水を流して水源としている。

桜の名所として知られ、春にはソメイヨシノを中心に約 160 本の桜がきれいな花を咲かせる。

例年、4 月初旬の日曜日に若泉公園桜まつりが行われる。

若泉公園から中山道方面に向かって進む。

若泉公園のすぐ南側にあるのが阿夫利天神社だ。

阿夫利天神社



石尊様とも呼ばれている。

山と雨乞いの神様を祭る阿夫利神社と火雷天神の神様を祭る天神社が大正2年（1913年）に合社し、阿夫利天神社となったものである。

社伝によると、阿夫利神社は、寿永年間（1182年～1184年）に源頼朝によって領地を受けた児玉党の本庄庄太郎家長が、かねてより信仰していた相州大山石尊大権現を領地内の当所に勧請したのが始まりである。

その隣接地に安養院が開基されると、明治初年の信教分離まで同寺が別当職を務めた。

一方、天神社は、天正2年（1574年）、本庄城主本庄宮内少輔実忠の命により城の鎮守として奉斎されたことに始まる。

慶長17年（1612年）に本庄城が廃城になると、天神社は村人の手によって守られた。

寛文7年（1667年）に慈恩寺境内に移され、その後、阿夫利神社に合祀された。

平成12年に放火により社殿が焼失したが、御神体が残り、平成14年に再建された。

阿夫利天神社の南側には普寛霊場がある。

普寛霊場



密教御嶽教の開祖である普寛上人の墓があるのが普寛霊場である。

普寛上人は、享保 16 年（1731 年）、現在の秩父市大滝に生まれ、本名を浅見好八といった。青年時代は秩父直神陰流の達人として剣術に優れていたという。

34 歳の時、人心救済を決して修験者となり、名を本明院普寛と改めた。

その後、厳しい修行を経て神仏両道の奥義を究めた。

木曾御嶽山、上州沼田の武尊山、越後の八海山などの登山道を開いたことでも有名である。

享和元年（1801 年）に特に縁を求めて本庄宿にとどまったが、同年 9 月に病没し、安養院に葬られた。

現在の霊場は、大正 11 年（1922 年）に安養院境内より移されたものである。

なお、上人をしのんで、毎年 4 月 10 日、10 月 10 日に全国から信者が集まり、大祭が行われている。

春の祭りでは、お祓いパレードや稚児行列のほか、境内で各種秘法・秘術、火渡り・刃渡りなどの荒行が行われる。

普寛霊場から伊勢崎新道に出て 150 メートルほど南に進み、細い道を右折して少し行くと安養院の門前に至る。

安養院



曹洞宗の寺で、山号を若泉山、寺号を無量寺という。文明 7 年（1475 年）創建。

本尊は無量寿如来で、ほかに脇立として観音と勢至の 2 つの菩薩がある。

もともとは、武蔵七党の一党である児玉党の一族本庄信明の弟の藤太郎雪茂が仏門に帰依して当時の富田村（現在の本庄市東富田）に安入庵を営んだが、その土地が水不足だったため、水源が豊かだった現在地に移設し、安養院を開基したと伝えられている。

以後、付近は水不足に悩まされることもなく、周辺の人々から“若泉の荘”と呼ばれるようになったという。

当時は、現在の若泉公園も安養院の境内であり、相当広がったようだ。

本庄城落城後衰退したが、その後再興され、慶安 2 年（1649 年）に徳川幕府から 25 石の朱印地を受けている。

戸谷半兵衛家や森田助左衛門家といった本庄宿の豪商たちの墓所でもある。

安養院から伊勢崎新道に戻り南に進むと、中央 3 丁目交差点の手前にちょっと目立つ蔵がある。

看板を見ると「蔵髪」（くらっぱ）となっている。蔵を美容室として使っているようだ。この蔵は、江戸時代には文具店丸十商店が倉庫として使っていたものらしい。

本庄市の中山道沿いには多くの蔵が残っているが、実際に店舗などに使われているものはそれほど多くない。

蔵髪



ちょっと一息



店主の植村貴之さんに話を伺った。

「自分は横浜育ちで、以前は横浜で美容師をしていたが、妻の実家の本庄市児玉町ということもあり、平成 25 年にここで店をオープンさせた」

蔵を使った理由は「もともと城や蔵が好きだった。また、蔵を美容室にすればインパクトもあると考えた」とのこと。見事に 160 年前の蔵を再生している。

2 階を見せてもらったところ、立派な梁が目につく。

柱には「安政 3 年棟上げ」という文字が記されている。安政 3 年は 1856 年だ。

「2 階は冬でも暖かく暖房がいらぬ。また、夏は涼しい。蔵好きの自分にとっては趣味と仕事が両立できていて満足している」と語ってくれた。

中央3丁目交差点から中山道を西に向かって歩く。

すると左側に煉瓦色の建物が目に入る。これが旧本庄商業銀行煉瓦倉庫だ。

旧本庄商業銀行煉瓦倉庫



明治29年（1896年）に、銀行が融資の担保として預かった大量の繭を保管するために建築したもの。

昭和51年からはローヤル洋菓子店として使われていたが、平成23年から本庄市の所有となっている。

煉瓦造2階建て寄棟造りで、深谷市にあった日本煉瓦製造の煉瓦が使われている。

桁行約36.4メートル、梁間約9.1メートルで、煉瓦はイギリス積みとなっている。

全国有数の繭の集散地として栄えた本庄市と繭の生産拠点であった周辺地域の歴史を伝える上で非常に重要な建築物である。

本庄市で改修工事を実施し、平成29年4月から交流・展示スペース、多目的ホールを備えた地域の交流拠点として生まれ変わった。

本庄市の繭市場（明治 45 年）



資料提供：本庄市教育員会事務局文化財保護課

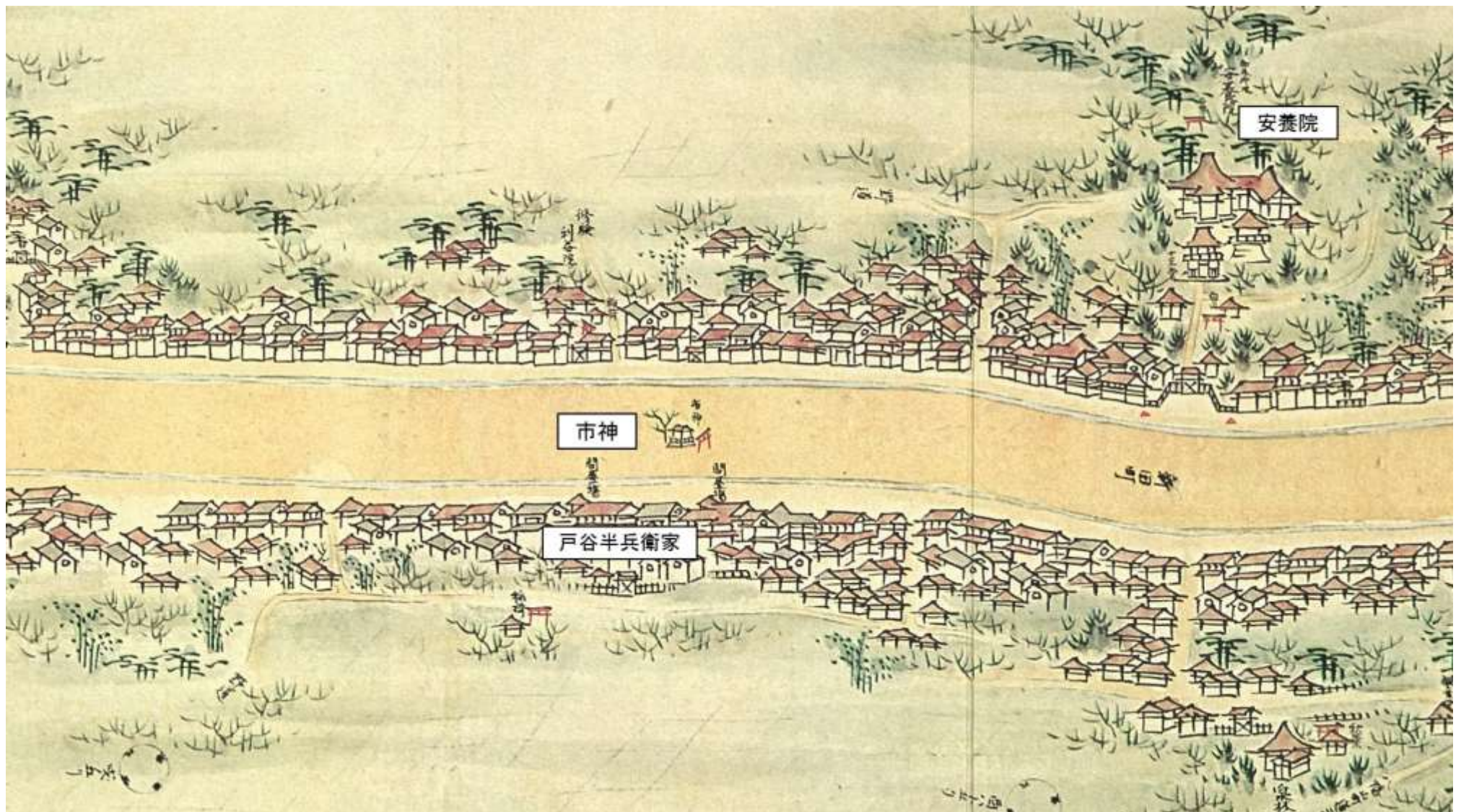


旧本庄商業銀行煉瓦倉庫前から西方向を望む

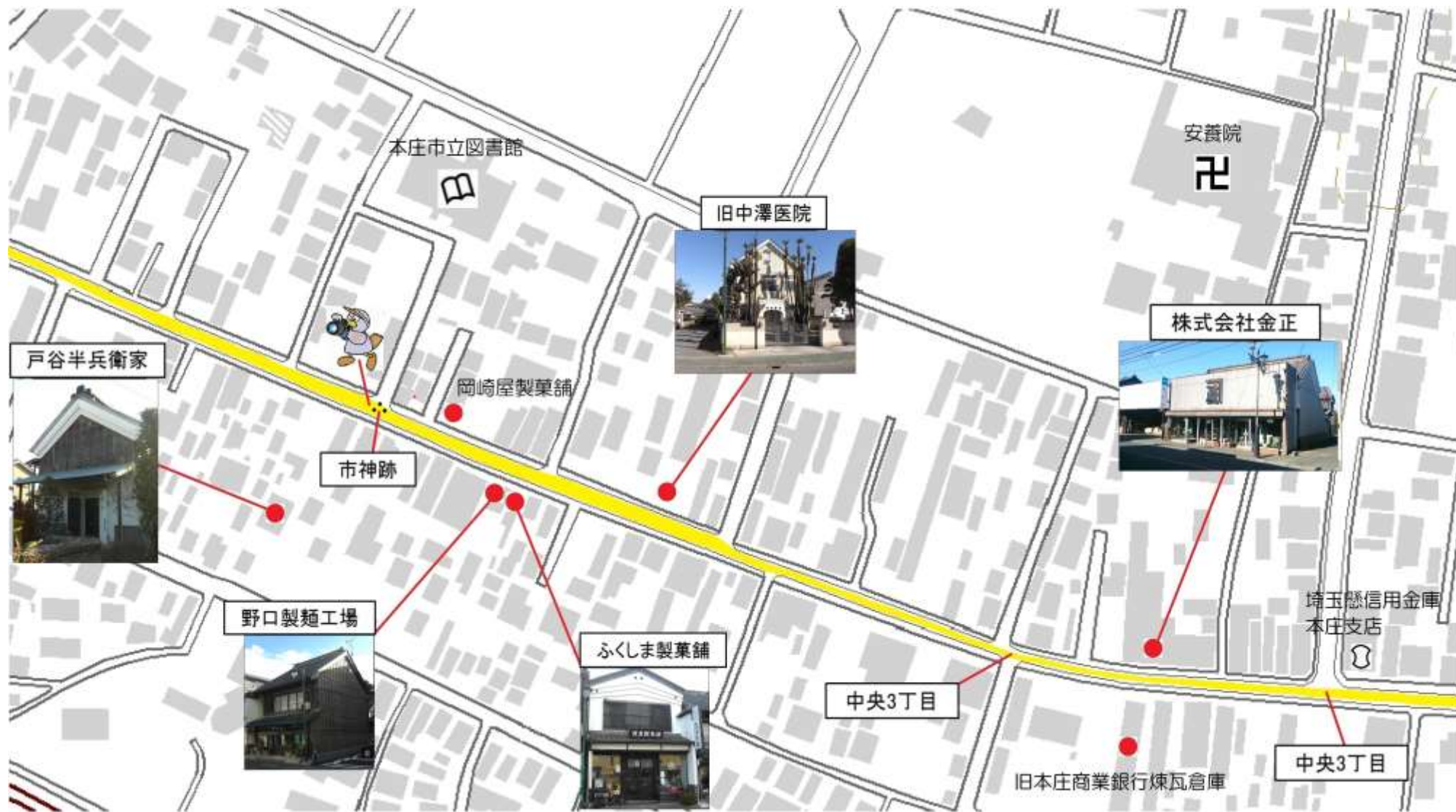


第7章 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 ～ 本庄市立図書館入口

江戸時代はこんな感じ



これが現在



旧本庄商業銀行煉瓦倉庫の相向かいに歴史を感じさせる店を発見。金物、日用雑貨を扱う株式会社金正だ。江戸時代は「油屋藤吉」という店名だった。

主の中村さんに話を聞くことができた。

株式会社金正



「創業して300年になる。もともとは油屋である。現在は刃物、金物を扱っている。この建物は慶応時代のものである」とのこと。

慶応と言えば江戸時代最後の元号である。

「商家高名録」(文政8年〔1825年])にも豪商中屋(戸谷)半兵衛とともに載っている。

敷地内を見せていただいた。

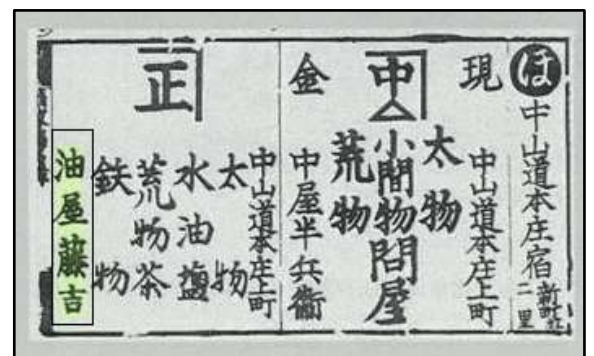
店舗の裏に蔵が残っている。安養院までが金正の敷地だ。かなり広い。

安養院の門の斜め前に立派な蔵がある。聞いたところ「あれもうちの蔵。店のすぐ裏にあったものだが、壁の剥がれがひどかったため、今の位置まで曳家した」とのことだった。

面白い話も聞かせてくれた。

「うちの本家は近江で、江戸時代は油を近江から水運(帆かけ船)で運んでいた。当時、馬を飼っており、利根川の船着き場まで馬で油を引き取りに行っていた」という。

ところで、曳家されたという蔵の横に見事な金木犀がある。これだけ立派な金木犀は見たことがない。



株式会社金正を出て西に向かって歩くと、すぐに「中央 3 丁目」交差点に差しかかる。

あれっ？

何これ？

手前の交差点も「中央 3 丁目」だったはず。
地図で調べてみると、中山道と伊勢崎新道が
交差するところも確かに「中央 3 丁目」。
同じ名前の交差点があるんですね。
インターネットで検索したところ、青森市、
弘前市には同じ名前の交差点が複数あるらしい。



それはさておき、さらに西に向かって歩みを進める。
注意をして歩くと、この辺りは、中山道から少し奥に入ったところに蔵がたくさん見られる。

ちょっと行くと右側に風情のある洋館風の建物がある。看板は、右から左に「中澤医院」となっている。

旧中澤医院

この建物は大正 15 年（1926 年）に建てられたものらしい。
新しい医院が別の場所に新築され、この建物は医院としては現在使われていない。
映画等のロケ現場としてよく使われているということだ。



旧中澤医院から歩を進めると、今度は左側に歴史のありそうな建物が 2 軒並んでいる。東側の家が「ふくしま製菓舗」、隣が「野口製麺工場」だ。

ふくしま製菓舗



蔵を利用した和菓子屋さんのような。

店の福島直子さんに話を聞いてみる。

「うちは昭和の初めから菓子屋をやっている。
40 年前に建て替えた時に蔵風の建物にした」

こんな話も聞かせてくれた。

「ここからちょっと西に行ったところに金鑽神社がある。そこでは、出雲大社に行っていた神様が帰ってくる 11 月 1 日（旧暦）の午前零時に神様をお迎えする『神迎祭（お神迎え）』という祭事が行なわれる。参拝の帰りには『福を買う』ということで、お菓子屋さんで豆大福を買って帰る』のだそうだ。

ただ、「昔はたくさん店が出て賑わっていたが、今ではお菓子屋で店を開けているのは、うちと岡崎屋製菓舗さんの 2 軒だけになってしまった」と語ってくれた。

ちなみに、このふくしま製菓舗の一押し商品は「宿場娘」。渋皮付きの栗を白あんで包み、ホワイトチョコレートをコーティングしたもので、上品な味わいが特徴だ。

こちらの店の生和菓子は、地域の多くの茶道の先生から御贖買いただいているらしい。

野口製麺工場



ふくしま製菓舗の隣にあるのが野口製麺工場。麺類各種を製造・販売している。かなり歴史を感じさせる建物だ。

店の次女の内海由美子さんに話を聞いてみる。

「ここに住んで今が6代目で店は江戸時代からやっている。この店舗は大正5年（1916年）に建てたもの」とのこと。100年以上経っている。

ここからすぐ西側に、江戸時代の豪商戸谷半兵衛家があるが、「うちの初代は戸谷半兵衛の店の番頭で、のれん分けをしてもらった。戸谷半兵衛の店が『中屋』で、うちが野口だからそれを合わせて店の名前は『中野屋』になった。今は『野口製麺工場』という名称だが、店の入口のガラスには、昔書いてもらった『中野屋製麺工場』という文字がそのまま残っている」と話してくれた。

この建物に惹かれるのか、「中山道歩きをしている人がよく立ち寄ってくれる」らしい。

レトロ感たっぷりの店内



ここから西に50メートルほど行くと左側に「本庄市立図書館」という案内板があり、その少し奥まったところに戸谷半兵衛家がある。

関東有数の豪商 戸谷半兵衛

戸谷半兵衛家は享保 18 年（1733 年）に初代戸谷光盛が「中屋」を創業してから、中屋半兵衛の名で太物、小間物、荒物を商い、「関八州田舎分限角力番付」（豪商番付）では西方筆頭の大関として位置付けられていた。

安永 2 年（1773 年）には本庄宿のほか、江戸に 5 店舗、さらに京都六角通りにも店を構えており、本庄店の使用人だけでも 39 人いたという。

3 代目半兵衛光寿のころには江戸で両替商を開業し、越中前田家、立花家、鍋島家など大名への融資も行っていった。この 3 家だけでも 15 万両を超える貸付けがあったという。

初代から慈善活動に熱心で、先に紹介した馬喰橋や相生橋を私費で石橋に架け替えたほか、神流川の渡し場に土橋をかけ、無賃渡しも自らの拠出した資金で実施した。

この渡し場に常夜灯を建立したのは 3 代目で、これらの功績により幕府から名字、帯刀を許されていたという。

しかし、4 代目のときに大名への融資金の回収ができなくなり、貸金の中に代官所からの御用金も含まれていたことから名字帯刀を取り上げられ、家財闕所の処分を受けた。





中山道から少し奥まったところにある戸谷家を訪れ、9代目に当たる圭一郎さんに話を伺った。

今でも十分な広さがあるが、昔は、北は図書館辺りまで、南はカトリック教会の先までが所有地だったらしい。古文書なども数多く残されていたが、個人では管理しきれないことから、数年前に県立文書館に委ねたという。

圭一郎さんによると、戸谷半兵衛家は初代から3代目までが最盛期で、江戸への出店を通じて次第に幕府とのつながりを強め、金の改鋳などにも関わるようになった。

天保の改革で有名な水野忠邦に近づき、金を融通していたらしいが、彼が失脚すると代官なども皆代わり潮目が変わってきたという。大名たちが借りた金を返してくれなかったこと、店が大きくなりすぎて使用人の監督が十分でなかったことなども稼業が衰退した原因だという。

幾多の慈善事業で本庄宿の繁栄に寄与してきたことに話が及ぶと、なかでも神流川の無賃渡しは特筆すべきことと語ってくれた。なお、溪斎英泉の浮世絵「本庄宿 神流川渡場」(本書表紙)に描かれた大名行列は、戸谷半兵衛が金を貸していた越中前田家の行列らしいとのトリビアも披露していただいた。

中山道に戻る。

中山道分間延絵図によると、江戸時代にはこの市立図書館入口辺りに市神(西の市神)があったらしい。

市神

市神は、市の取引の無事や幸福を与えると信じられている市の守護神。

神体は円形の自然石が多く、神社の境内や市の開かれる場所の路傍に祭られていた(中山道分間延絵図でも道の真ん中に描かれている)。

本庄宿には、本町の市神(東の市神)と新田町の市神(西の市神)があり、これらは、定期市が開かれた寛文3年(1663年)に建てられたものである。

本庄宿には定期市がなかったが、近傍の榛沢村(現在の深谷市)に交渉して定期市開催の権利を譲り受けた。市神はその時に榛沢村から移転したもので、毎年1月7日の初市には榛沢新田の武井浅右衛門が神官を同道し、市神に神幣を供していたらしい。

定期市は、本町・中町・上町で、毎月2、7の日計6回開かれていた。

ちなみに、西の市神は金鑽譚神社に合祀されている。

道の真ん中に神が祭られているなどということは今では考えられない。

ところで、中山道の道の真ん中と言えば、江戸時代末期に本庄宿でとんでもないことをした人物がいる。芹沢鴨だ。

本庄の事件簿 ～新選組大篝火事件～

京都守護の任につく第14代将軍家茂の警護を目的に、幕府は文久3年（1863年）、その前年に結成した浪士隊（後の新選組）を京都に向かわせた。

一行は2月8日に江戸を出立。2月10日、3日目の宿泊地となる本庄宿に入り、ここで事件は起こった。

宿割役池田徳太郎、同手伝役の近藤勇が本庄に先乗りし、隊の宿割をしたが、どうしたわけか芹沢鴨の宿所を書き忘れてしまった。夕方になり本隊が到着したが芹沢鴨の宿がない。

芹沢鴨の難物ぶりはつとに知られるところ。芹沢は烈火のごとく怒った。両名は早速宿の手配をして芹沢に詫びたが怒りは収まらない。

「宿がなければ外で寝る。篝火を焚け」と部下の土方歳三、沖田総司、永倉新八などに命じ、手当たり次第に木材を集めさせて宿の真ん中で大焚火を始めた。

驚いた宿役人が駆けつけて咎めると、芹沢は大鉄扉を振り上げて宿役人を殴り倒した。

火の粉は宿中に降り、宿民は火事になっては困るからと水桶を持って屋根に登って火の粉を消す始末で、寝ることもできない。

池田と近藤の再三の謝罪によって芹沢は用意された部屋に入り、ようやく大篝火事件は落ち着いた。

浪士隊は翌11日に本庄宿を立ち、23日に京の壬生に到着した。

この事件を伝える記録は残念ながら本庄には残っておらず、真偽は不明でフィクションと考えられてきた。

その後、新選組浪士の一人、永倉新八が晩年を過ごした北海道で新聞記者の取材に応じ、新選組について語ったものが小樽新聞に掲載された。

それによると、「芹沢は一徹短慮の男で3百匁の大鉄扇を離さず、粗暴の拳動ある有名な壮士、さあ宿がないというので大立腹で、急に3番組の隊員を集め野陣を張ると言い渡し『大篝火を焚くから驚くな』と宿中に触れ出した。間もなく本庄宿の夜は天を焦がさんばかりの大篝火に照らされて物凄いような光景となった・・・」となっている。

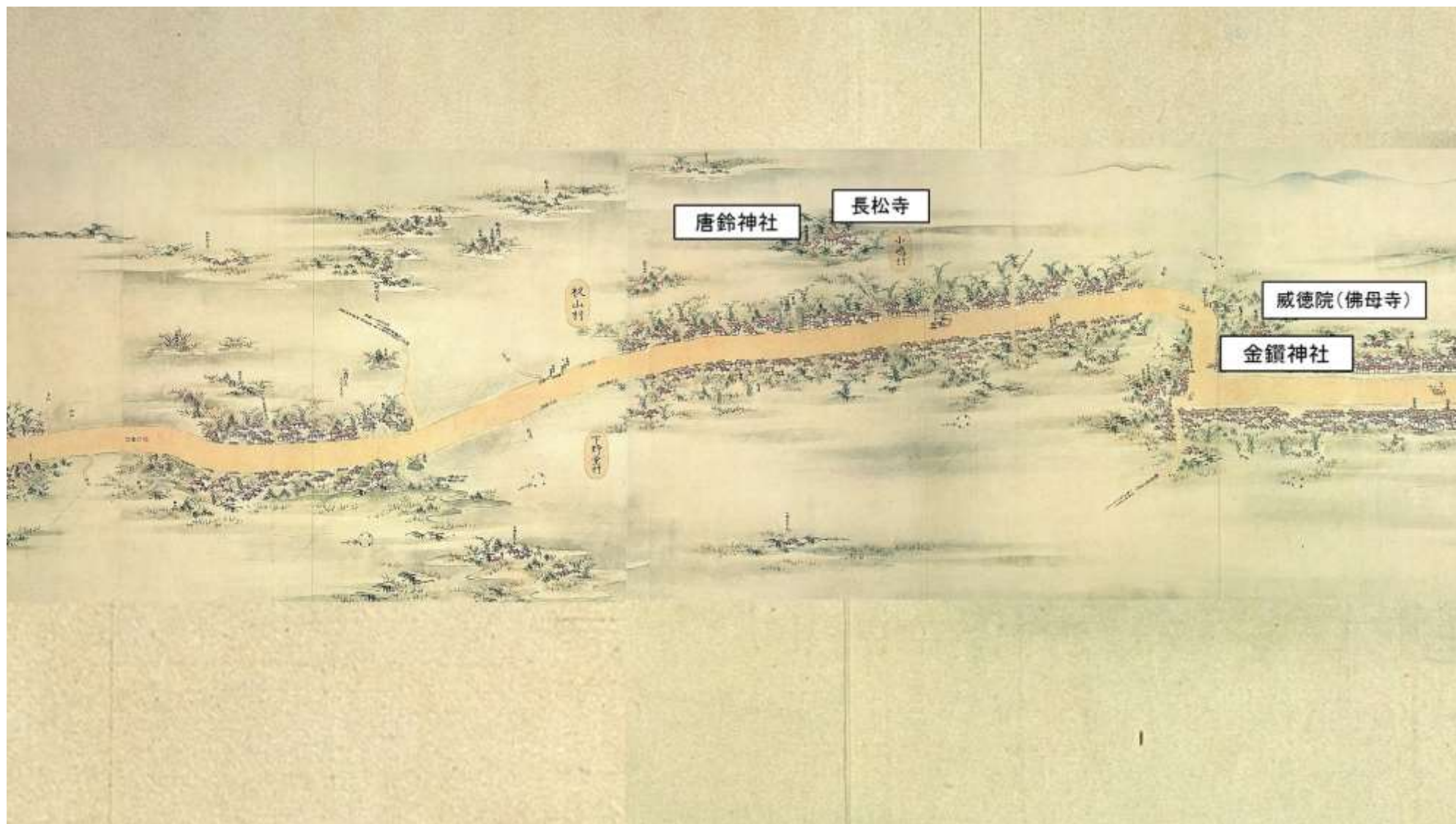


 本庄市立図書館入口から西方向を望む



第8章 本庄市立図書館入口～上里町神保原（本庄市・上里町境）

江戸時代はこんな感じ



これが現在



本庄市立図書館入口から西へ80mほど進むと右手に大きな蔵が3棟見えてくる。中山道から奥に向かい、板張りの蔵、白壁の蔵、赤煉瓦の蔵と3つの蔵が並んでいる。

これが「本庄宮本・蔵の街」だ。

本庄宮本・蔵の街



これらの蔵は明治43年から平成21年まで酒問屋小森商店の本庄支店の蔵として使われていた。

小森商店は本店は騎西にあり、現在は株式会社釜屋として埼玉の地酒で有名な「力士」を販売している。

一の蔵（板張り、元は黒漆喰）は明治12年築造の書類などを保管する店蔵。

二の蔵（白壁）は明治22年築造の味噌、醤油の蔵。

三の蔵（赤煉瓦）は大正10年築造の完成した商品を保管する酒蔵。

築造された時代によって外装が違うのが面白い。

小森商店開業前の江戸時代、ここには「穀屋」という店があった。主は真塩治右衛門で穀物、醤油などを扱っていた。文化年間には旅籠屋も経営していたそうだ。

一の蔵、二の蔵は穀屋時代に、三の蔵は小森商店時代に築造されたものだ。

小森商店が閉店した後、市民グループ「本庄まちNET」の保存運動により、平成22年、敷地全体が「本庄宮本・蔵の街」として生まれ変わった。



「本庄まちNET」代表で一の蔵に建築設計事務所を構える戸谷正夫さんに話を伺った。

「蔵のある街並みを残そうという民間のプロジェクトでできた街。ヨーロッパもそうだが、その土地の記憶があるものは残しつつ、新しいものを作っていくのが大事だと思う。蔵の中は暗いのではないかとよく聞かれるが、そうでもない。居心地は素晴らしい」と話してくれた。

現在、二の蔵はカフェ、三の蔵は行政書士事務所になっている。

ここで寄り道 ～本庄グルメ～

cafe NINOKURA

「本庄宮本・蔵の街」の3つの蔵のうち、白壁の二の蔵には、ほっこりと居心地の良いカフェが入っている。その名も「cafe NINOKURA」。

店の中に入ると包み込まれるような安心感。テーブルやイスなどは再利用したもので、不揃いだがどこか懐かしいものばかり。不思議と落ち着く空間である。

1階はカフェ、2階は板張りで20帖あり、幅3mのスクリーンを備えたフリースペースとして貸し出している。

蔵主の飯塚さんは「これはいいと思った地元のもの、そして旬の食材を活かして丁寧に作った料理と飲み物を出すようにしている」とのこと。

「今日のごはんプレート」
「つみっこ膳」ともに優しい味付けでからだに喜ぶランチだ。飲み物に付くちょこっとデザートもうれしい。

メニューには蔵主さんこだわりの食材の仕入先が表示されていて安心できる。

本庄のご当地グルメ「つみっこ膳」

(右上がつみっこ)



中山道に戻り、さらに西に進んでみる。

250メートルほど行くと右側にあるのが金鑽神社だ。

金鑽神社



社伝によると、創立は欽明天皇の2年（541年）となっている。武蔵七党のひとつである児玉党の氏神であったが、本庄城主歴代の崇信も厚かった。

境内は欒や銀杏などの老樹に囲まれ、本殿と拝殿を幣殿でつないだいわゆる権現造りの社殿のほか、大門、神楽殿、神輿殿などが建っている。

本殿は享保9年（1724年）、拝殿は安永7年（1778年）、幣殿は嘉永3年（1850年）の再建で、本殿は、日光東照宮の改修や妻沼聖天宮の造営もしている上州「花輪の甚八」こと石原吟八郎の作である。

それぞれ、細部に見事な極彩色の彫刻が施されており、幣殿には本庄宿の武正南慮や小倉紅於らが描いた花鳥画がある。

御神木となっている楠木の巨木は県指定の天然記念物で、幹回り5.1メートル、高さは約20メートル。本庄城主小笠原信嶺の孫にあたる忠貴が社殿建立の記念として献木したものと伝えられている。



11月2～3日に行われる本庄まつり（金鑽神社秋季大祭）は本庄の鎮守様のお祭りとして親しまれており、絢爛豪華な山車が晩秋の中山道を優雅に巡行する。

金鑽神社のすぐ北側にあるのが佛母寺だ。

佛母寺

佛母寺は、もとは山号を金鑽山威徳院白蓮寺といい、高野山聖僧威徳房玄正が天授元年（1375年）に開創したと言われている。

金鑽神社の別当寺で、明治期に神仏分離令により廃寺となった。

明治17年（1884年）に壇信徒の発起により再興を出願。翌年、埼玉県知事により許可になり佛母寺として再興された。

鐘楼の「妙音殿」額は元総理大臣吉田茂の揮毫による。

金鑽山威徳院白蓮寺の建物としては、文化11年（1814年）に建立されたと伝えられる大門が金鑽神社に残っている。



中山道に戻り旅を続ける。

金鑽神社を少し西に進むと「千代田3丁目」交差点に差しかかる。

ここを右折した道（国道462号）が中山道だ。

国道462号を北に向かって歩くと、ん？

何これ？

歩道に中山道各宿場の名前を記した絵タイルが貼られている（埼玉県内の宿は絵タイル。それ以外は宿場名のみ）。

千代田3丁目交差点から高尾歩道橋手前までで長さは100メートル余りだ。

板橋宿から数えてみると草津宿まで68ある。

あれっ、中山道の宿場って69じゃなかった？

そうだ、最後の大津宿がない。よく見ると、1か所タイルが剥がれたような跡が・・・



この高尾歩道橋のところを左折して西方向に進む。

350メートルほど進むと左から来る道と合流。

合流した地点から250メートルほど行くと差しかかるのが「小島4丁目」交差点。ここを右折してちょっと行った右側にあるのが長松寺だ。

長松寺

唐鈴山薬師院と称する弘法大師空海を宗祖とする真言宗の寺である。

開山は祐海法印で、創建年代は江戸時代初期と思われる。

本堂の西側及び北側の山林の中に土塁、空堀が残っている。これは、館址の遺構で、武蔵武士のひとつ丹党の一族小島氏の居館址と伝えられている。

この周辺にあった百余基の古墳は旭・小島古墳群と命名され、県選定の重要遺跡となっている。

本庄市のマスコットキャラクター「はにぽん」のモデルとなった盾持人物埴輪は、この古墳群の中の「前の山古墳」から出土している。



長松寺の入口のところから道路に沿って 220 メートルほど見事な銀杏並木の参道が続き、その奥に唐鈴神社の本殿がある。

唐鈴神社



社伝によると、遣唐使として唐に渡った大伴宿根古麿が天平勝宝年間（749 年～757 年）に帰国の折、唐の玄宗皇帝より渡海安全のための金鈴を授けられた。その子古佐美の子である良麿が五穀豊穰を願い、社を創立した。



その後、帰京を任せられた良麿は、神宝の盗難を恐れ、それらを石函に入れ社の下に埋めた。

幾歳月が過ぎ、戦乱の世に社も破壊されたが、これを嘆いた近在の人々が再興のため社跡を掘ると石函が出土し、中に5つの金鈴があったという。これが唐鈴神社の由来である。

ところで、この神社にまつわる魔物伝説がある。

貞観4年(862年)、この辺りでは天災や不吉なことが続いていた。

そこで、国司は神官に命じて火雷神社(群馬県玉村町下之宮)において神事を執り行わせようとし、その際、副使として武士那波八郎廣純を同行させた。

神官が祈祷を行っていたときに魔物が姿を現し、神鏡を奪おうとしたので那波八郎廣純は刀を振ってその首を切り落とした。

このとき、魔物の折れた角を川に投げ、後に淵になったところが現在の玉村町「角淵」であり、切った手を捨てたところが玉村町「上之手」(神の手)であるという。

そして、魔物の首を祭ったのがこの唐鈴神社とされている。

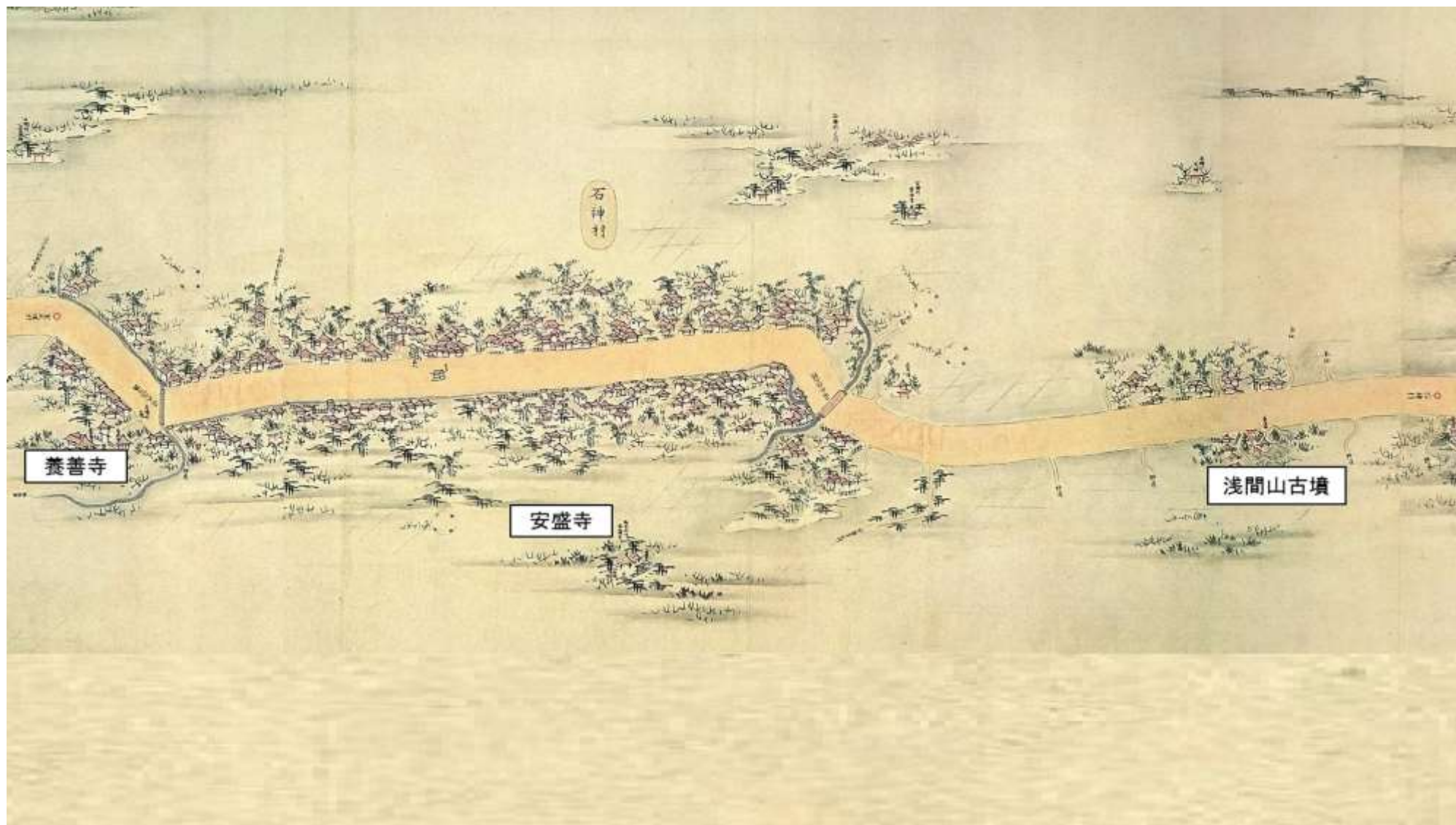


本庄市・上里町境から西方向を望む



第9章 上里町神保原（本庄市・上里町境）～ 神保原1丁目交差点

江戸時代はこんな感じ



これが現在



中山道の旅もいよいよ上里町に突入。

西に向かって進むとすぐ左側に小高い山と赤い鳥居が現れる。浅間山古墳だ。

浅間山古墳



本庄市西部から上里町東部に広がる旭・小島古墳群の一基で、7世紀前半に造られた横穴式石室を持つ古墳である。

直径約38メートル、高さ約6メートルの円墳と考えられており、古墳の上には富士浅間神社が祭られている。

昭和2年の調査で直刀や矢じり、金環などが発見され、一部は東京国立博物館に保管されている。

外から石室の中を見ることができる。

ところで、この浅間山古墳にはこんなエピソードがある。



江戸時代には、この石室内で夜な夜な賭博が行われていたらしい。

明かりも音も外には漏れないと考えたのだろう。

蝋燭の火のもと、丁半が繰り広げられる光景が目浮かぶようだ。



中仙道の標柱

浅間山古墳の反対側の根岸家の一角に「中仙道」という標柱がある。標柱の裏を確認させてもらったところ、「この道は中仙道。今、この呼び名が消えそうなので後世に伝えたく米寿を記念してこれを建てる 平成11年4月1日」と記されている。

主の根岸さんによると、「父親が建てたもの。ガイドブック片手に中山道を歩く人がよく写真を撮っていく」とのことだった。



「中仙道の標柱」から少し行くと右側に泪橋跡がある。これも個人の敷地の一角である。

泪橋跡

置かれているのは泪橋の石製の欄干の一部だ。

昔は、この辺に小さな川があったらしい。

石碑の裏には「徳川幕府は、大名等が通行する際、街道住民に伝馬という苦役を課した。住民は、この橋に憩い、家族を偲び、身のはかなさを嘆いて涙を流した」とある。

伝馬とは、宿場から次の宿場に行く時に乗り継ぐ馬のこ

とで、人や馬の常備が宿場には義務付けられていた。往来が激しくなると、人や馬の不足を補うために近隣の住民は人馬継立に従事をさせられ、それは農繁期であっても免れなかったために大きな負担となっていた。



主の根岸晃さんに話を伺った。

「手前が橋の欄干で、その後ろの石碑に由来が書かれている。この石碑はうちで作ったもの。庭を直す時に一緒にきれいにしたものだ。庚申塔や石仏は近くに置き去りにされたものを集めて欄干の横に置いた」とのことだった。

西に向かう。「神保原陸橋（北）」交差点を過ぎて60メートルほど行き、細い道を左折。70メートルほど行った突き当りを右に進むと安盛寺がある。

安盛寺

曹洞宗の寺で、昌福寺（深谷市人見）の末寺である。

天正10年（1582年）の神流川の合戦で一切を焼失したが、その後、元和年中（1615年～1624年）に奥喜兵衛慰安盛により再興されたことから安盛寺と改称した。



社殿の前に弥勒如来像が鎮座している。

もともとは養善寺に建立されたものだが、明治3年（1870年）の廃仏毀釈（仏教を廃毀し僧侶を排斥する宗教政策）の際、引き倒された上、首を落とされ、頭は地中に、胴体は橋のたもとに埋められてしまった。

それから7年経った明治10年（1877年）、村内に疫病が蔓延した。

村民はこれを弥勒如来の祟りだとして頭と胴体を掘り出し、安盛寺に安置した。



ところで、安盛寺境内には面白いものがある。

門をくぐってすぐ左手にいろいろな石仏と馬頭観音や庚申塔などが置かれている。これはどこから集められたものなのか？

反対側には木の切り株も祭られている。



安盛寺から中山道に戻って旅を続ける。
すぐに小さな橋に差しかかる。楠森橋だ。

この橋の先は鉤の手（直角）に曲がっている。

これは防衛の一手段であり、敵が一気に攻めてこられないように、また、敵を追い詰めやすくするために宿や城下町の入口をわざわざ直角に曲げたということだ。



左にカーブし、300メートルほど行くと神保原駅入口に差しかかる。

神保原駅入口から西方向を望む



駅入口からちょっと先のところに庚申塔がある。
各地に庚申塔はあるが、このように道の両端に残っているのは珍しい。

駅入口から南に向かって400メートルあまり進むと神保原駅だ。

神保原駅



神保原駅は明治30年（1897年）に開設された。

駅名は当時の村名、神保原村（石神村、忍保村、八町河原村が明治22年〔1889年〕に合併）に由来する。

昭和9年築のレトロな駅舎が残っている。

ところで、神保原駅の1番ホームには七福神の像が鎮座している。

さらにこのホームには池もあり、乗客の目を楽しませてくれる。

ちょっと一息



唐澤伸哉駅長に話を伺った。

「うちの社員は色々なアイデアを出してくれる。ホームの七福神も社員のアイデアにより始めたもの。昨年2月にリニューアルし、おみくじ箱も置いた」とのこと。

おみくじの内容は50種類あり、誰でも無料で引くことができる。

また、池には鯉や金魚が19匹いるという。

「これからも様々な取組をして神保原駅をPRしていきたい」と語ってくれた。



試しにおみくじを引いたら「大吉」だった。



神保原駅にはこんなエピソードもある。

昭和 37 年頃の話。

神保原駅では、急行列車の待ち合わせのため普通列車が 1 日に 8 本、7～13 分ほど停車していた。

ホーム内には水道施設がなかったため、当時の柳沢源太郎駅長の「駅の井戸水は保健所検査でも優良な折り紙つき。この冷たい水をやかんで運べば乗客に飲んでもらえる」というアイデアが実行されるようになった。

当時の新聞は、林間学校に行く児童たちの「ちょうどのどが渴いていたので生き返った」とこのサービスが大評判だったことを伝えている。

しかし、昭和 40 年になると神流川の砂利乱掘で濁水に見舞われるようになり、地下水も枯れてしまった。給水サービスは簡易水道を利用して続けられたが、水は生ぬるく乗客たちには不評だった。

これを聞いた駅前のキムラヤ乳業株式会社では、「うちの冷蔵庫で水を冷やしましょう」と駅に申し入れ、駅員と同社による冷水サービスが行われるようになった。

乗客は「砂漠のオアシス」と夏の暑さをしばし忘れ大喜びだったそうだ。

駅を出てすぐ左折すると右側にあるのがアイスクリームのキムラヤ乳業株式会社だ。

キムラヤ乳業株式会社

実はグリコのパピコはここで作っている。

大手メーカーから委託されたアイスの製造が中心だが、冬場は上里町産の小麦と神川町のブランド豚である「姫豚」を使った「こむぎっち肉まん」も製造している。

「こむぎっち肉まん」は、上里サービスエリア下り線で販売している。



代表の木村忍さんは、「クール＆ホットのアイテムでおいしさと癒しを提供している。パピコは全国に向けて出荷。また、こむぎっち肉まんは、地域振興のために何かできないかということで、上里産の小麦と町のマスコットキャラクターである『こむぎっち』を組み合わせで作ったものである」と語ってくれた。



上里町マスコットキャラクター
こむぎっち

この近くに近所でも評判の和菓子屋があると聞いたのでちょっと足を延ばしてみる。

キムラヤ乳業株式会社の前を80メートルほど西に行くと広い通りが出る。ここを左折して踏切を渡るとすぐ左側にあるのが「塚越製菓店」だ。

ここで寄り道 ～上里グルメ～

塚越製菓店

店の前には「だんご」「くさ餅」という幟がはためいている。

ここは上里町で唯一の和菓子専門店らしい。

店主の塚越一久さんに話を伺った。

「この地で創業してから50年ほどになる。私は2代目である」

売れ筋を聞いたところ、「人気があるのはみたらしだんご。この時期（3月）は草餅もよく出る。だんごは注文を受けてから焼いている」とのこと。

温かいみたらしだんごは焦げ目が香ばしく生地はもちり。程よいあまじょっぱさがいい。



さて、中山道の旅を続けよう。

神保原駅入口まで戻り、西にしばらく進むと「神保原 1 丁目」交差点に差しかかる。

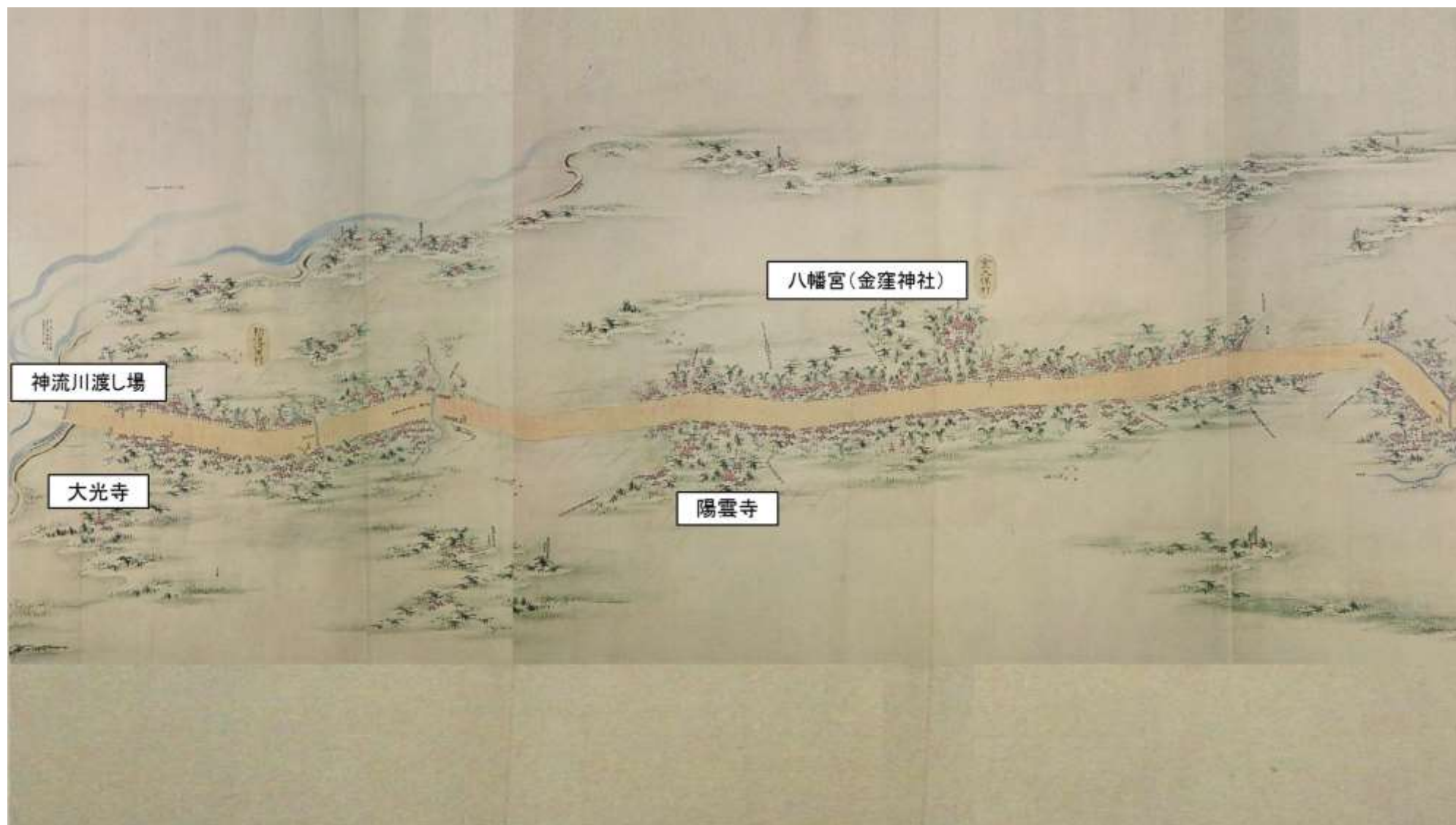
この辺りは村の出入り口にあたる鉤の手で、ここを右折する道が中山道だ。

安盛寺の弥勒如来像がもともと安置されていた養善寺はこの交差点の西側にあった。



第10章 神保原1丁目交差点～神流川橋

江戸時代はこんな感じ



これが現在



「神保原 1 丁目」交差点を右折して 130 メートルほど行くと国道 17 号の「神保原（北）」交差点に差しかかる。

ここを渡って 750 メートルほど西に進むと右側にあるのが金窪神社だ。

金窪神社

戦国時代の金窪城主斎藤氏が鎌倉八幡宮を城内に勧請したのがはじまり。

神流川の合戦で斎藤氏が滅んだ後は、村人が村の鎮守として祭るようになった。

石柱には八幡神社とある。

毎年 10 月には雨乞い獅子と呼ばれる獅子舞の奉納がある。



金窪神社は、拝殿の天井絵と本殿の彫刻が素晴らしいことで知られている。

天井絵（雲竜図）



本殿の彫刻（東面）



拝殿の格天井には 67 枚の絵があり、中央にある雲竜図は祥雲斎俊信によるものだ。また、本殿の東・北・西の 3 面に彫刻がある。

ところで、この彫刻にはこんなエピソードがある。

この彫刻は、明治中頃に東京の湯島天神が発注したものだが、どうも寸法が合わなかったらしい。

この話を聞いた上里町出身の岩田忠一郎氏（大蔵省職員で当時は東京府庁に出向中）が、「それでは上里町でいただきますよ」ということで交渉して譲り受け、金窪神社にはめ込んだということだ。

金窪神社を出て350メートルほど進むと民家の角に消火栓ボックスと並んで「三国道入口」の石柱が建っている。

ここは、中山道から分かれ、烏川を渡って角瀧（群馬県玉村町）へ向かう三国道の分岐点。

新町宿が成立するまでは、ここを右折する道が上州、越後に向かう主要道路であった。



この石柱のすぐ先の左側が陽雲寺の入口だ。

陽雲寺

元久2年（1205年）の創建と伝えられる曹洞宗の寺。はじめ満願寺と称した。

徳川家康が関東に入府した際、武田信玄の甥である川窪信俊がこの地に配置され、信玄夫人（陽雲院）を境内に住ませたとされており、没後その菩提を弔うため陽雲寺と改称した。



武田信玄夫妻のものとして伝えられる画像など武田家関連の資料が残されている。

信玄夫人は京都の三条家の出身であることから、明治時代には、武田家末裔の宮司武田正樹と政府の要人三条実美とのやりとりの記録も残されている。

また、新田義貞の家臣で金窪城主であった畑時能（畑和元埼玉県知事の先祖に当たるらしい）の墓もある。

陽雲寺の石の大門を出て西に向かう。

60メートルほど進むと畑時能の首塚と伝えられる愛宕塚がある。

この先の道を右折し、少し中山道から離れるが、金久保村の名主を代々勤めた須賀家に立ち寄ってみる。

須賀家



中山道から700メートルほど入った西金公会堂の先、立派な長屋門のある家が須賀家だ。

須賀家は18世紀中頃から金久保村の名主を代々勤めた家で、地主でもあった。嘉永2年（1849年）には小作人が21人いたという記録が残っている。

また、烏川の藤ノ木河岸を通して、藍玉、大豆、蚕種などを取引し、質屋金融も行っていた。

江戸の物価情報を絶えず入手しており、江戸の商人から送られてきた「米、麦、大豆などの品目と値段が刷られている書状」や「大豆の値段が急騰したのでたくさん送ってほしい旨の書状」が残されている。



この辺りには昔ながらの立派な家や蔵が今でも残っている

ちょっと一息



当主の須賀正昭さんに話を伺った。

「私で17代目。祖父は賀美村の村長、父は上里村議会議員だった」
それにしても長屋門も母屋も立派だ。敷地も相当広かったらしい。

「この家は明治の初めころに建てたもの。サッシ、トイレ、お風呂以外は手を入れていない。昔は養蚕をやっていて高窓も4つあったが、台風などの時に危険なので外した」と語ってくれた。

中山道に戻って旅を続ける。

西に向かって650メートルほど進むと、国道17号と合流するちょっと手前の右側に高窓のある家が目に入る。

高窓の家と勝場庚申塔群

なかなか歴史があり
そんな家である。

中山道から一步入ると高窓のある家を見ることができ、中山道沿いでは唯一ではないか。

奥には蔵もある。



この家の東側には二十二夜様1基と庚申塔3基が並んでいる。

庚申塔群の前の坂は「庚申坂」と呼ばれているらしい。



一里塚碑と天王社

高窓の家のすぐ西側に一里塚跡がある。

江戸時代、各街道に一里塚が整備された。

これは旅人の目印にしたもので、一里ごとに5間4方の塚を置き、頂上には榎が植えられた。

この塚は日本橋から23番目の一里塚だった。

その跡地には「天王社」が祭られている。



一里塚跡から進むとすぐに国道17号と合流する。「勅使河原(北)」交差点だ。さらに150メートルほど進むと「神流川橋(南)」交差点に差しかかる。

「大光寺」という案内板に沿ってこの交差点を左折し、250メートルほど行くと大光寺に到着する。

大光寺

臨済宗円覚寺派の寺で、健保3年（1215年）に武蔵七党の勅使河原権三郎有直が創建。勧請開山は、日本へ初めて禅宗を伝えた栄西禅師である。

天正10年（1582年）の神流川の合戦により総門のみを残して焼失。

また、寛永8年（1631年）には神流川の大洪水で境内が水中に沈んだ。

さらに、明治42年（1909年）には、高崎線の列車の煙火により引火して総門、土蔵を残し全焼したため、本堂等を再建し現在に至っている。

神流川渡し場のたもと（本庄宿側）に建立された常夜灯（見透燈籠）が保存されている。



神流川の両岸には、旅人の便のために常夜灯が設けられていた。

本庄宿側の常夜灯は戸谷半兵衛が文化12年（1815年）に建立したもので、夜に火を灯すと両岸がよく見透せたので「見透燈籠」と呼ばれていた。

文政5年（1822年）に大雨による洪水で流出し、そのままになっていたが、安政4年（1857年）の大雨がこれを砂中より洗い出し、勅使河原村の人達によって掘り出され、大光寺に再興された。

ところで、新町宿側の燈籠建立にはこんな話がある。

文化7年（1810年）5月、俳人の小林一茶が新町宿の旅籠に泊まっていたところ、夜更けに突然起こされた。見れば提灯を持った者がいるので事情を聞いたところ、「神流川に燈籠を建て川渡りの助けにしたいから寄付を」とのことだった。一茶は懐がさびしかったので免除を願ったが承知されず、結局12文を寄進したということだ。

ちなみに、当時はかけそば1杯が16文だった。

新町宿側の燈籠は高崎市の諏訪神社に移築されている。

大光寺を出て中山道に向かう。

北に向かって進んでいると右側に小山が見え、そこに多くの庚申塔らしきものが建っている。細い道を右折して進むとそこにあるのが勝場百庚申塚だ。

勝場百庚申塚

西暦では 60 の倍数が庚申の年であり、この塚は庚申の年である万延元年（1860 年）に地元の人によって造られた。

その後、大正 9 年（1920 年）にも庚申塔が造られ、合わせて祭られている。

130 余基あり、上里町内最大の庚申塚である。



近所に住む今田長一さんによると、「60 年に 1 回お祭りがある。自分が若いころにあった」とのこと。

「あちこち傷んできているので地域みんなで直そうという話をしているが、なかなか実現しない。ただ、何年か前から、年に 3 回くらい交代で塚をきれいにしている」ということだ。

「季節になるときれいな桜が咲く。それを電車で見た人がわざわざ降りて見に来ることもある」と話してくれた。

中山道に戻る。「神流川橋（南）」交差点を左折して西に進むとすぐに神流川橋だ。

神流川の渡し場跡

神流川の渡しは中山道本庄宿と新町宿の間の渡し場である。溪斎英泉の浮世絵「本庄宿 神流川渡場」（本書表紙）にその様子を見ることができる。

宝永以前は勅使河原村が川越人足を出し賃銭を取って渡していたが、安永 3 年（1774 年）になり新町宿が幕府に冥加金を納めることを条件に土橋を架けて賃銭を取ることを願い出たことから、翌年には勅使河原村も同様の願いを出し、長い争議となった。

安永 6 年（1777 年）に戸谷半兵衛が仲介に入る。半兵衛は 100 両を上納して以後の土橋修繕費に充てることで無賃渡しとする願いを道中奉行に出し、許されて天明元年（1781 年）に自費で長さ 30 間、幅 2 間の土橋を架け、渡船 1 艘による無賃渡しが始まった。



神流川橋から群馬方向を望む



神流川合戦古戦場跡

天正 10 年（1582 年）の 6 月 18 日から 19 日にかけて、織田信長の家臣として上州と信州の一部を治めていた滝川一益と、相模国を中心に関東南部を所領としていた北條氏が神流川で戦った。

当初は滝川勢が攻勢だったが、翌日には北條氏に押し切れ大敗した。

この合戦は、戦死者が両軍合わせて 4 千余人を数え、戦国時代関東における最大の激戦と言われている。

また、この時の兵火で上里町にあった寺院の多くが焼失し、大光寺の山門のみが残ったと伝えられている。

上里町側の堤防上に説明板があり、橋を渡った新町側に神流川古戦場の碑がある。



中山道は、神流川に架かる国道 17 号の神流川橋を渡り、新町宿（群馬県）へと入っていく・・・

本書を執筆するに当たり、以下の文献を参考にさせていただきました。

主要参考文献

- 本庄市発行『本庄市史』
- 上里町発行『上里町史』
- 柴崎起三雄著『本庄のむかし』

中山道最大の宿『本庄宿』の再発見 その弐 本庄市中央3丁目～上里町神流川橋

中山道街並み調査班

- 企画・監修 石川 勉
- 調査・執筆 田沼 孝夫
- グルメリポート 設楽 大輔 新里 清恵
- 挿絵 風間由香梨

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所

〒367-0026

埼玉県本庄市朝日町 1-4-6

TEL 0495-24-1110

2017年3月発行

※本書で使用している地図（4頁、14頁、24頁、32頁、42頁）は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図（タイル）を複製したものです。
（承認番号 平28情複第1079号）



大光寺「見透燈籠」



埼玉県マスコット「コバトン」&「さいたまっち」